

「ブランコのむこうで ～私という“ぼく”のスタートライン～」

医学部 栄養学科 大林由季

星新一の世界に一瞬にして引き込まれた。私はいつの間にか主人公の“ぼく”であった。“ぼく”はたくさんの人の「夢の国」を渡り歩いた。

そして、気付いたんだ。「夢」は心の鏡だということに。人間は何かしら、自分ではどうしようもない感情を抱いている。それは喪失感かもしれないし、孤独感や挫折感かもしれない。あるいは、過剰なまでの自尊心や欲望のような激しい感情かもしれない。「夢」はそれらの影響を色濃く受けている。ある人は戻ることのできない過去を懐かしみ、ある人は亡くした我が子を探し続けていた。また、ある人は理想の自分像を作り出し、自分のための世界を作り出した。現実社会では「どうしようもないことだ」と諦めや理性で抑えていた感情が、「夢の国」では剥き出しになる。“ぼく”はそんな“剥き出し”の人々と交わり、現実世界で生きる彼らと重ね合わせ、人というものを知った。現実で“ぼく”の目の前で笑っている人が、心の底でも笑っているとは限らない。悲しみを隠して必死に生きているかもしれないんだ。気付かないといけない。“ぼく”は現実世界に生きる者だからこそ、現実世界で気付いてあげなければいけない。さらけ出してしまえば楽なのに、多くの人がさらけ出すことのできない心。ああ、こんなにも心には重みがあるものなのか。“ぼく”は家族や友達の「夢の国」を見ることはできない。けれども、見られないからこそ、些細な動きや表情、会話の端々から心を感じ取ることが出来るようになりたいと思う。温かい心や嬉しい楽しい心なら分け合おう。悲しい気持ちや腹立たしい気持ちなら削り合おう。「夢の国」を旅する内に、そんな気持ちにさせられたんだ。

そんな中、ある「夢の国」で“ぼく”はある老人と出会った。“ぼく”は彼との出会いを忘れられない。その人は夢の中でさえ、非力な己を磨き続けていた。彼は大きな大理石を刻み続け、やりがいのある作品を完成させようと挫折を繰り返してきた。そんな彼の集大成は道にある小さな穴を大理石で塞ぐという“ちっぽけ”なこと。彼は“ぼく”に言った。「みんながみんな偉大なことを完成するとは限らない。完成できたほうがいいにはまっているが、できない人だってあるんだ。わたしは失敗に終わってしまった。しかし、完成を心にえがきながら、ずっと楽しく生きてきたよ。楽しく生きてきたような気がするだけかもしれないがね。これでいいのだろう。」

この作品を読み終えた後も“ぼく”には彼の言葉が心に深く残っている。彼は小説の中に残った“ぼく”には別の教訓を、そして、本を飛び出して生きる“ぼく”にも希望の「夢」に進む大切な道しるべを残してくれた。失敗を恐れて進まないより、例え失敗しても、理想を追いかけて過ごした日々がある限り、決して不幸な結末になど成り得ない。もう一度、あきらめかけた夢と理想を抱いて、今日から始まる“ぼく”の日々を歩んでいこう。

星さん、あなたの「夢の国」には何見えますか。“ぼく”の「夢の国」には明るい光がやっと見えてきました。